ボーダーライン

松嶋ネコヂロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ボーダーライン

【Ｎコード】
Ｎ６３２１Ｙ

【作者名】
松嶋ネコヂロウ

【あらすじ】
自分の意志で生まれてくる者はいない。だから、自分の意志で自分の命を断ってはいけない。何も疑わず、ただ盲目的に生きていればいい。大した理由もなくただ死にたがる君は、跳ねっ返りたいだけの不良なんだ。――赤いボーダーラインに魅了された少女。自殺者の完結しないｗｅｂ漫画。生と死の円に揺り動かされ、彼女はついに最後の一線を越える。

序章

荒涼な廃墟ビルの上、彼女は屋上の縁に立つ。

縁には半径二〇センチほどのフラフープ型の赤い円が描かれている。彼女はぴったりとその円の中におさまっていた。すぐ前方の足もとには、赤い一本のライン。赤いラインは、まるで足場の有無を隔てるかのように引かれていた。

吉村は知っている。屋上の下、はるか下方の地面にも、同様に赤いフラフープが描かれていることを。

誰かが言う。屋上の縁にある円は生、ビル真下の地面の円は死、そして、縁の端に引かれたラインは二つの境界を現しているのだと。

生の円から境界のラインを飛び越え、死の円へと急降下。

彼女は鼻歌を唄いながら、ローファーのつま先でラインをなぞった。吹き荒れる風が制服のスカートを揺らす。

彼女は本気なのだ。吉村は、手にしたものをパーカーのポケットに仕舞った。そのまま、ポケットに両手を入れて彼女の動向をうかがう。

ふと、鼻歌が止む。彼女は首だけを傾げ、吉村を振り返った。

「やっぱり、分かんないよ」

哀しげな声に、吉村は微笑む。

「どういうことかな」

彼女はつま先を引っ込め、ローファーを脱いで円の中に並べた。両足をそろえ、ラインの前に立ち直す。顔を前に向け、遠くに夕日が沈んでいく様を眺望した。

「あたし、生きるのが辛いわけじゃないんだよ。ぜんぜん。それなりに苦しいことや辛いこともあったけど、それでも人並みだったって自分でも思う。むしろ楽しいことの方が多かったかも。これ、結構まじめに。なのに、なんで死んじゃうんだろうね。あたしさ、ずーっと考えてたんだ。なんであたし、死んじゃうんだろうって。—

―でも、やっと分かった気がする」
彼女は地面の赤いラインを指さした。
「越えてくださいって言ってるようなものだよ、これ。あたし、もう我慢できない。越えちゃいたい。境界線のこと考えるたびに胸を掻き毟りたくなって、飛び越える夢ばっかり見てさ、辛抱たまらんっていうか。ねえ、そういうのって吉村くんにもあるよね。ちょっとくらい、いいじゃんって」
「どうだろう」
吉村は後頭部を？いて考える。
「でも、言われてみればあるかもね。校則破ったりとか、ほんの弾みで万引きしちゃったときとか。ふっと無意識に体が動いて、越えてはいけない一線を越えてしまう」
「惜しいけど、だいたいそんな感じ」
二人は顔を見合わせ、ほぼ同時に笑った。強風が彼らの笑い声を飛ばし、乱暴に髪を撫でつける。
風が静止したのは、夕日も完全に落ちきった頃だった。彼女のシルエットは黒く、口に含んだ飴玉が頬の裏側を這って転がるのが分かった。
「吉村くん」
急に声を小さくする彼女に、吉村は「どうしたの」と怪訝に応える。
「あんたのこと、結構好きだったよ」
吉村はさらに当惑し小さく苦笑う。この状況で告白されるなんて、なかなか奇妙だと思う。
「僕も好きだったよ、咲子さん」
彼女は目をしばたかせた。吉村は目を凝らし、その細かな表情の変化を見る。やがて彼女は頬を緩め、笑って言うのだった。
「ばーか」
再び風が吹き荒れる。それは屋上の塵を巻き上げ、視界を覆った。吉村は目を閉じ、風が止むのを待った。

瞼を押し上げたとき、彼女はもうそこにはいなかった。音もなく、そこにいたという気配すら残さないほどの空虚感を示していた。ゆっくりと赤い円とラインに近づき、身を乗り出してビルの下を見おろす。

彼女は地面に細い体を横たえ、四肢をあらゆる方向へと投げ出していた。頭から流れ出る赤いものが、じんわりと広がっていった。

長い時間をかけ、噛みしめるように階段を降り、吉村は地上を踏んだ。

化石のように寂れたビルの入り口を抜けると、彼女の遺体を眺める。耳や目から血を吹き出し、耐えず彼女の中身は外へと放出されていく。

腰を屈めてその顔をよく見る。綺麗だった顔は、そのほとんどが潰れ、見るも無残に変形している。もはや原型など認識できない。身体の方も強い衝撃を受け、あちこちから骨が突き出ている。唇をぽっかりと開き、端から舌が垂れ下がる。口の中を見つめながら、吉村は不審な点に気付く。

あるはずのものが、そこにはなかった。

念のため周辺を探してみる。携帯のライトをかざし、周囲の地面を見て回る。いくら探しても、不審の種は見当たらなかった。もう一度彼女のそばに膝をつけ、口元とその地面に注目する。

やっぱりおかしい。彼女はたしかに、飴を舐めていたはずだ。

普通ならば、落下するショックで思わず飲み込んでしまったのだろうと考える。だがそれでは違和感が残る。口から吐き出されたような赤い跡が、地面を伝って十五センチほど伸びている。その血痕の先に飴玉はない。それとも、これはなにかの勘違いだろうか。

そのとき、彼女の瞳がかすかに揺れた。少し目を離せば見逃してしまうほど小さな動きだった。

「咲子さん」

また、瞳は揺れる。瞼はただの肉片と化し、眼球は赤黒い。
「君、本当に咲子さんだよね？」
静寂が辺りを包み込む。
彼女の瞳は、もう二度と動かなかった。

一話

道場の更衣室を開ける。すでに袴に着替えた堀ちゃんがにやりと笑って、こちらに近づいてきた。
「さっきぃ、早く着替えて。おもしろいもの見せてあげる」
と、堀ちゃんは手招きをして更衣室を出ていった。更衣室の隅で固まっておしゃべりしていた年下の子たちが、「サキちゃん、おもしろいものってなあに？」と目を輝かせた。
「知らない。堀ちゃんに聞いてよ」
さっさと道衣に着替えて、スポーツバッグをロッカーに突っ込んだ。年下の子たちに、「あんたたちはもうストレッチ始めてて。あと、先生が来たら言っといてね。自分と堀ちゃん、ちょっとだけ遅刻しますって」と言いつけて、自分は更衣室を出た。
道場の玄関前で、堀ちゃんはもうスニーカーを履いて待っていた。自分は呆れながらも、やむなく運動靴を履いて堀ちゃんに駆け寄った。
「堀ちゃん、もうすぐ稽古はじまるよ」
「ちょっとくらい遅れたって大丈夫だってば。だって今日の師範、宮子先生だよ」
さらっと言って、堀ちゃんは歩き出す。宮子先生は気の弱いお姉さん先生だ。小学生なのに、教え子の堀ちゃんの方が偉そうな口を利く。
ちなみに、堀ちゃんの言う『ちょっと遅れる』は、ふつうの感覚での『ちょっと』じゃない。自由な女の子なのだ。おおいに遅刻する気でいるのだろう。
そう思って、あたしはチュッパチャプスを一個持ってきていた。更衣室で包装をやぶって、もう口に入れてある。三十本入りで買って、最後まで余ったやつ。プリン味。デザート系の飴はあんまり好きじゃない。

堀ちゃんは道場を横切って、隣にある公民館の裏手に回った。公民館の裏には林があって、その中へと足を踏み入れる。雑草が靴と袴の間からちくちくと触る。痒みと秋の寒気に耐えながら、必死に堀ちゃんのあとを追う。

ふいに堀ちゃんが足を止めた。

日当たりが悪いためか、その一角は周りと比べて薄暗く、木や草があまり生えていない。空を見上げると、日光を遮るように高速道路の底面が頭上を覆っていた。

「さっきぃ、あれ」

堀ちゃんがあたしの肩をたたいて、痩せた木の根元を指した。そこには真っ黒い何かが横たわっている。いきなり堀ちゃんから背中を押され、ちょっとつんのめりながら、自分はその黒いものに近づいた。そして、小さな悲鳴を上げる。

カラスの死体だった。

黒い翼には枯れ葉がつもっている。二日前に降った季節外れの粉雪も、いまだに残っていた。首すじのところについばまれた跡がある。そこだけ赤黒く凝固していた。生気のない目を虚空に投げ、カラスはぐったりと死んでいた。

カァ、と頭上で鳴く。見ると、痩せた木々にとまった数羽のカラスが自分たちを見下ろしていた。

堀ちゃんが駆け足でやってきて、木の中腹にキックした。騒々しい音を立て、臆病なカラスが二羽逃げていく。それ以外のカラスは我関せずとばかりに木を譲らない。

舌打ちをして、堀ちゃんはカラスの死体のそばに屈んだ。

「さっきぃ。このカラス、ちょっと普通じゃないんだよ」

たしかに普通じゃない。だって死んでいるんだもの。

「埋めてあげる？」

堀ちゃんは首を振った。誰がそんな面倒くさいことするもんか、とでも言いたげに。その代わりに堀ちゃんは、彼女の考えるそのカラスの普通じゃないところを説明した。

「この死骸、昨日見つけたんだ。二日前に降った雪が積もってるから、たぶん、こいつが死んだのはもっと前。だけど、少なくとも昨日からぜんぜん変わってない。おかしいでしょ」
「おかしいかな」
堀ちゃんが頭上を指さした。一羽のカラスが、ばさり、と羽ばたく。
「カラスは共食いする動物なんだ。だけどこいつ、一回首んとこ突つかれただけで、ほとんど食べられてない。しかもこんな地面で倒れている。普通、カラスって自分のねぐらで死ぬものでしょ」
堀ちゃんの話を聞きながら、口の中でプリン味を転がす。死骸の目を眺めていると、心なしか息が詰まった。
堀ちゃんは足もとにあった枝で死骸につもった枯れ葉と雪をどけた。いっしょに羽が抜けて、寒そうな肌が間からのぞく。
「きっとこのカラス、病気持ちだったんだよ。体に毒を持っていて、ねぐらに帰る前に力つきちゃったんだ。そんで、ちょっと食べてみたカラスが、うえ、まず、って。だからみんな、こいつのこと食べないんだよ」
あたしは首を傾げる。
「じゃあ、なんでカラスたちはこの死骸に集まるんだろう。もう食べるつもりなんかないんだよね」
言いながら、ふとある光景を思い出す。いつか堀ちゃんたちと、家族ぐるみで原宿に出かけたことがある。駅前広場の隅っこで、これと似たようなカラスの死骸があった。それは何日間も放置されたように腐りかけていて、不思議に思った堀ちゃんが、通りかかった警官にこう尋ねた。
『なんで片づけないんですか？』
そんな彼女の質問に、警官はあごに手を当てながら答える。
『ああいうのは区の仕事だから、おじさんにはよく分からないよ。でもおそらく、ああして仲間の死骸を晒すことで他のカラスを寄せ付けないようにしているんだろう。戦国時代の晒し首みたいにね。

悪さをしたら、おまえらもこうなるんだぞって。そういうカラス除けなのさ。いやしかし、いくらなんでもそろそろ除去するよう言わないとなあ。ご忠告ありがとうね、お嬢ちゃん』

なんとも悪趣味な話であった。

堀ちゃんは空中で枝をぐるぐるさせながら、うぅん、とうなって考えた。堀ちゃんもそのときのことを思い出しているのかもしれない。

自分も、堀ちゃんと一緒に考えてみる。原宿の警官が言うように、カラスの死骸がカラス除けになるのなら、こうして彼らが死骸により集まってくるのはおかしい。加えて、共食いをする気もないようだ。ならば、彼らの目的は一体なんだろう？

堀ちゃんの手にした小枝が、空中で止まった。

「たぶん、こいつらは仲間の死骸を餌に、獲物が来ないか見張ってるんだよ。カラスって弱肉強食では上位だから。野犬や野良猫でもかまわず襲うって話だよ」

うん、きっとそうだ、堀ちゃんはそうつぶやいて、枯れ葉をどける作業に戻った。自分はチュッパチャプスを口から出して、小さくため息を吐いた。

こうなった堀ちゃんは長い。彼女は死を見るのが好きだ。死んだものを延々と眺めては、なんでこいつは死んだのかとか、こいつの人生はこうだったとか、あれこれと想像を巡らせる。終いには、あたしがいることを忘れて独り言までつぶやきはじめる。そんな彼女の口からは、『かわいそう』という言葉は出ない。いや、言うには言うが、自分には、彼女が心の底から『かわいそう』と言っているようには思えない。体裁でしかないのである。

合気道の稽古を終えると、外は暗くなり始めている。母の迎えがくるまで、自分たちはまたカラスの死骸を眺めていくことにした。

カラスの死骸はずたずたに荒らされていた。代わりに、そのそば

で一匹の猫がカラスたちによって喰われていた。ハイエナしにきた野良だろう。運悪く、あの猫は罠にかかってしまった。
「あたしの推理は正解だった」
堀ちゃんは嬉しそうに笑って、カラスの集団に突っ込んでいった。カラスたちはぎゃあぎゃあと喚きながら四方に散っていく。残ったのは荒らされたカラスの死骸と、さらにずたぼろにされた野良猫の醜い姿だけだった。
野良猫は片目の暗い眼底をこちらに見せていた。眼球を垂れ、管を地面へとのばしている。堀ちゃんは雑草で目玉を包むようにして、猫の片目にはめてあげた。そしてこちらを振り返る。
「埋めてあげよっか。カワイソウだし」
堀ちゃんは、無垢で純粋な小学六年生の笑顔を作った。自分は複雑な心持ちで、そんな堀ちゃんを真似して笑ってみせた。
「うん、埋めよう。カワイソウだし」
とがった石を探してきて、堀ちゃんの隣に座る。「手まり飴、食べる？」と勧めてみたが、堀ちゃんは首を振って「いらない。これ吸いたいし」と、バージニア・エスをくわえて火を点けた。
「うわっ。煙草とか不良ー」
「格好いいでしょ」
ふー、と堀ちゃんは煙を吐く。自分は手まり飴を舐める。それから穴を掘り始めた。

そんな堀ちゃんは、どういうわけか、死体や事故現場によく出会う。まるで堀ちゃんの意に沿うように、彼女は何度もばらばらの肉片やどろどろの血を見つけ出す。彼女と行動をともにすると、自分もそういう現場に数回ほど立ち会えた。
堀ちゃんとの出会いは小学四年生のとき、西養館の少年合気道部への入会がきっかけだった。そのわずか一週間後、自分は最初の事故を目撃する。

西養館の師範の縁で、都内の武道館で行われた試合を見学したときのこと。大人同士の試合で、受け身を誤り、じかに頭から落下した女性がいた。

自分たち子供は二階の観客席から見学していた。広い武道館の中、いくつもの試合が同時に行われていたにも関わらず、堀ちゃんは目敏くそれを発見し、あたしの肩をつっついて教えてくれた。

「さっきぃ。あれ、あれ」

名前を呼ばれたのはそれが初めてだったのに、彼女はあたしをへんてこなあだ名で呼んだ。戸惑いながらも、自分は彼女の示す方を見やる。

審判が、倒れた女性に恐る恐る近づいているところだった。仰向けに伏した女性は、遠くから見ても分かるくらい深刻な痙攣を起こしていた。びくりびくりと、死にかけの小魚みたいに。やがて彼女は、口から泡を吹きだした。

「救護、早く！」審判がどなった。

会場全体が異変を察知し、場は騒然とする。自分のとなりに座っていた小さな男の子は、彼のお父さんによって目をふさがれた。

堀ちゃんがあたしの手をつかんだ。

「下に行って、もっとよく見てみよう」

急いで一階に降りて試合場に向かったが、入り口を大人たちが通せんぼしていて、入れてくれなかった。

あとで聞いた話だと、その女性はすみやかに病院へ搬送され手術を受けたが、大人たちの連携むなしく半身不随となってしまったそうだ。

二回目はたしか、それから半年後。

合気道がきっかけで、うちの母親と堀ちゃんのお母さんが仲良くなり、四人で長野へスキー旅行に出かけた。

ペンションの一室に宿泊した夜のこと。四人いっしょの部屋を取っていたのだが、その早朝、堀ちゃんがこっそりとあたしを起こし

て、「散歩に行こう」と誘ってきた。前日のスキーと乗り物疲れのため、初めは断ったのだけど、堀ちゃんは何かに追い立てられるみたいにあたしを急かした。

できる限り厚着をして、二人でペンション近くの山に登った。スキー場を一望しながらぼんやり歩いていると、堀ちゃんが「あっ」と言ってあたしの注意を引いた。

一匹の子狐が、山道を横切っていく。

「かわいいっ」と自分たちは声をそろえた。真っ先に子狐の後を追い、木々の間に入った。

雪に足をとられながらも、子狐を見失わないように必死で走った。間もなくして、空気を切り裂く乾いた音とともに、子狐の小さな体が跳ねた。子狐は雪に倒れ伏し、横腹から血を流していた。雪が赤く染まっていく。

なにが起こったのか分からず、自分たちは呆然と足を止める。無言で、じゅくじゅくとしたストロベリーのかき氷みたいな雪を見つめた。何者かの命が奪われる瞬間を見るのは、自分にとってそれが初めてだった。

「こらっ、おめえたち！」

とつぜん、野太い男の人の声が響きわたる。現れたのは、重厚な猟銃を脇に抱えたマタギのお爺さんだった。

「撃たれてえのかおめえら。危ねえだろが、さっさと失せろっ！」

一通りまくしたてられて、おめえらの親にもひとこと言ってやる、とまで言われてしまう。マタギのお爺さんはかなり怒っていた。自分たちは手をつないだまま、お爺さんから逃げるように下山した。

そのようにして、堀ちゃんと一緒にいると、自分は幾度も残酷な光景を見ることができた。

学校帰り、隣の市立小学校に通う堀ちゃんと待ち合わせをして遊びに行くと、途中の川で入水自殺らしき死体が流されていた。背広を着た禿げ上がったおじさんで、自分たちは橋の上から長い時間を

かけてその膨れ上がった死体を眺めた。おじさんはゆったりと流されていく。もうすぐ見えなくなるというところで、自分は携帯電話で警察に通報した。

ある日には、真白ヶ丘駅の閑散とした駐輪場で、高校生の太った女の子が、一心不乱で猫を殺しているのを発見した。道場の帰り道、偶然の目撃であった。女の子はぶつぶつと何事かを呟きながら、トンカチを何度も猫の頭に降りおろしていた。ぴくりとも動かない猫は、口から薄ピンクの白子のようなものを吐き出していた。堀ちゃんは太った女の子に手を振った。女の子は堀ちゃんを一瞥しただけで、その残虐な行為を機械的に繰り返した。

またある日には、川崎の街道で拳銃を持って暴れ回る男の人を見た。これはのちに、全国的に有名な事件となる。サングラスをかけた恐い顔のおじさんが、男の人の足下で死んでいた。そのとき自分は、堀ちゃんと、堀ちゃんのお母さんの三人でファミリーレストランにいた。窓際のテーブルで、惨劇はそこからよく観察できた。堀ちゃんのお母さんが慌てて自分たちの頭を掴み、テーブルの下に伏せさせた。外では大勢の警察がやって来て、男の人を囲んでいた。堀ちゃんのお母さんは顔をうつむかせ耳をふさいでいたが、自分と堀ちゃんはテーブルとソファの間からその様子を眺めた。幾度かの銃声のあと、男の人は射殺された。

堀ちゃんは言う。「あたしは呪われているんだ」と、どこか楽しそうに。自分の知らないところでも、堀ちゃんは様々な死に遭遇するのだという。たしかに呪われていると思う。自分はそんな、堀ちゃんの危うげなところが好きだった。

中学へは、堀ちゃんも自分と同じ学校に通うことになった。真白ヶ丘市の北にある中学校だ。堀ちゃんは隣の市から四十分もかけて通学した。

北中は合気道部がないので、自分たちは柔道部に所属した。西養

館の合気道道場では二人の実力は拮抗していたが、柔道では堀ちゃんの方が頭一個抜けて才能があるようだった。
二年の夏の合宿を終えた帰り道、男子柔道部の幸司くんと、一年生の清美と、堀ちゃんの四人で歩いていたときのこと。
後輩の清美が「この前、面白い噂を聞きました」と、自分たち三人の興味を引いた。
「真白ヶ丘市に、いわくつきの廃墟ビルがあるって話。聞いたことあります？」
清美はこういう噂をたくさん知っている。オカルティックなものが好きなのだ。それに答えるのは幸司くんだった。
「聞いたことあるぜ、おれ。たしか吉門町にあるっていうお化けビルだ」
自分と堀ちゃんは、それを聞いて震えあがった。死体は日頃から見慣れていたが、お化けはいまだに苦手だった。それをいち早く察知して、清美がまず堀ちゃんをからかった。
「堀先輩、もしかして怖いんですか？」
「怖いもんか。ばかにするな」
次に、彼女はあたしをからかう。
「先輩は？」
「正直、ちょっと怖い」
「さっきぃ先輩、かわいー」
一年生のくせに、清美は生意気だ。ちょっと背が高いからって自分を子供扱いするし、あだ名だって堀ちゃんの真似っこだ。
自分は、前々からこのあだ名が気に食わなかった。何度も普通に呼んでくれとお願いしているのに、堀ちゃんも清美も口をそろえて、「名前が古くさいんだから、このあだ名の方がかわいい」と返されるばかりだった。名前が古くさいだなんて、この二人だけには言われたくない。
コンビニで市のポケットマップを買って、人気のない公園で広げた。幸司くんと清美があれこれ言いながら、お化けビルの場所を探

した。
「たしか、ここですよ」
清美が指したのは吉門の四丁目だった。
「おれはここだと聞いたけどな」
しかし幸司くんは六丁目だと言う。自分と堀ちゃんは知らんぷりで、二人の気が済むまで黙っていた。自分は手まり飴を舐めて、堀ちゃんはバージニア・エスを吸った。
やがて言い合いにしびれを切らした幸司くんが、ぱたりとポケットマップを閉じた。
「清美とおれ、どっちが正しいか、今度調べに行こうぜ」
「二人で行きなよ。デートついでにさ」
堀ちゃんが冷めた顔で言った。幸司くんは顔を真っ赤にして「この四人で行くんだよ」と声を荒げた。
それから、幸司くんと清美が交互に吉門のお化けビルについて説明してきた。その結果、自分たちもそのビルに興味を持つようになってしまう。吉門のお化けビルは、ただでまかせに幽霊が出るというだけではなく、具体的な事例に基づいた噂だったからだ。
およそ三年前、ある女の子が飛び降り自殺したのだという。深夜だったため、彼女が飛び降りる瞬間を見た者はいない。遺体は早朝、犬の散歩をしていたお婆さんによって発見された。
「現場には、奇妙な落書きがあったそうです」と、清美が鼻息を荒くして言った。
女の子の遺体は、赤いドーナツ状の円の上で倒れていた。それと同じような赤い円が屋上にも描かれており、その円の中に彼女の靴がそろえて置かれていた。そして屋上の縁には、生と死、二つの円の境界を隔てるように、これもまた真っ赤なラインが引かれていたのだという。
「その意味深な模様のある方が、噂のお化けビルってことになるな」
幸司くんはそう言うが、自分には少なくとも、事件があった場所にそんな落書きがいつまでも残されているとは思えなかった。自分

はじっと、ポケットマップを見つめていた。
「ちょっと面白そうかも、お化けビル」
そんな自分の言葉に、清美がくすりと笑う。
「あれえ、さっきぃ先輩、お化け怖いんじゃなかったんですか？」
「うるさいなあ」
堀ちゃんは後ろで煙草を吸いながら、そんなあたしたちのやりとりを眺めていた。明らかに興味を持っていたが、いまいち踏ん切りがつかないようである。
「堀ちゃんはどうする？」
訊いてみると、堀ちゃんはかかとで火種をつぶしながら悩んだ。
「あたし、忙しいから行かない」
「そんなこと言って、堀先輩もやっぱり怖いんですよね、お化け」
例によって清美はからかうが、堀ちゃんはクールにそっぽを向いた。そしてぽつりとささやく。
「さっきぃ、お化けビルに行ったら報告よろしく」
そんなに興味があるなら行けばいいのに。やれやれといった風に自分は首肯した。

二話

噂の正確さを競った結果、敗れたのは清美だった。

吉門町の四丁目は住宅開発が進んでおり、今現在も古い建造物は取り壊しのさなかにある。廃墟と呼べそうなビルは見当たらなかった。

「きっとなくなっちゃったんですよ、お化けビル」

清美は言い訳したが、念のため六丁目の方に行ってみると、それらしき廃墟を発見した。川沿いの道をはずれ、田圃道を歩くと、小高い山の陰に隠れるようにして寂れたフェンスの門がそびえていた。門には立ち入り禁止の注意書きがある。

無視して入っていくと、まず一番に巨大な機械鉄塔が出迎えた。よく分からない素材の廃材があたり一帯に打ち捨てられている。セメント工場か何かだったのだろうか。広い更地にぽつんと佇立する看板にはヘルメットを被った作業服のキャラクターが描かれていたが、錆が酷いために顔がよく分からない。その看板だけでなく、この敷地のありとあらゆる物が錆びきっているようだった。

奥へ進んでいくと、事務所として使われていたのか、コンクリートを剥き出しにした八階建てのビルディングがあった。

幸司くんが「きっとあれだ！」と、真っ先にビルへと駆けて行った。その不気味な佇まいから、自分としてはこれ以上近寄りたいと思えなかったのだが、男の子は冒険好きな生き物なのだ。

一方の清美は、四丁目の時点では悔しそうな表情を浮かべるばかりだったが、この廃墟に訪れた途端顔色を変え、興奮気味にあちこちを見回してデジカメのシャッターを切っていた。

「おーい」

幸司くんがビルの入り口付近で手を振る。早くこっちに来い、と自分たちを呼んだ。

彼は地面のある一点を指していた。近づいて見ると、ひび割れた

アスファルトに噂通りのリングが描かれていた。自分は血のように濃い赤を想像していたのだが、赤というよりは朱色に近い色をしている。といっても、雨風に薄れた印象はない。もともとそういった色のスプレーで描かれたものらしい。

「どうだ清美、ここが本物のお化けビルだっただろ」

幸司くんは偉そうに言うが、清美は彼の声が耳に入らないように感嘆の息を吐いて朱色のリングを撮影した。

ビルの内部に入る。もろくなったコンクリートが剥がれ落ち、所々で鉄骨が露出している。まるで巨大竜の骨の中にでもいるような気分だった。壁面にはバブルの香りを残したポスターが貼ってある。ビートルズだった。指先でなぞると、ビートルズのポスターは枯れ葉のような音を立てて崩れた。

幸司くんを先頭に屋上を目指す。あたしの後ろで、清美がデジカメをいじり続ける。

「こんな壮大な廃墟がこの町にあったなんて。どうして今まで来なかったんだろう。ブログのネタになりますよこれ。私、週一でここに通ってもいいくらいです。あぁ、なんとすばらしい」

とりとめもなく独り言を呟く清美は怖かった。

「やめなよ清美。こういうところって大抵、悪い人たちのたまり場になってるものだから」

自分は、階段や通路の至るところにある下手くそな落書きを流し見た。清美は急に元気をなくし、細々と「それは、物騒ですね」と口ずさむ。柔道をやっているとは言え、自分たちは一女子中学生でしかない。あたしは幸司くんに向けて言う。

「もし悪いやつらが現れたら、あんたが戦ってよ。男だし、柔道も強いんだから」

幸司くんは肩をすくめた。

「柔道なんてただのスポーツだ」

屋上に到達する。

廃墟一帯を見下ろし、山越しの真白ヶ丘市を一望すると、思いのほか気分がよかった。遅れて階段室から出てきた清美が、気持ちよさそうに深呼吸をする。それを真似して自分と幸司くんも大きく息を吸ってみたが、突如として砂塵が巻き上がり、三人同時にむせてしまった。

お目当ての模様を探す。目を凝らして探すまでもなく、それは屋上の縁で見つかった。堂々と存在感を主張するように、朱色のリングとラインが描かれている。その太い朱線に手をつき、おっかなびっくり地上を見下ろすと、ちょうど真下にさきほど見つけた円を確認できた。

「なんか、あっけないな」

幸司くんは少し退屈そうに、朱線から手を離した。

「そうですね、お化けにも出会えなかったし。お昼だからかな」

そんなもの、自分は端っから出会うつもりはなかった。目的は初めからここにしかない。ラインとリングのざらりとした手触りを確かめ、今一度、遥か下方に視線を落とす。

確かにここで、人が死んだのだ。

凄惨な死体や切迫した死の瞬間を目にするのとは、また違った味わいがある。歴史博物館にでも訪れたような情緒あるロマンを感じることができた。

死は風化する。ふいにそんなことを思った。多くの死は数十年と時を置かず、人々の記憶から抹消される。たとえ誰かが覚えていたとしても、今この瞬間を生きる者が百年先まで生存している確率は限りなく少ない。一部の著名人の死は歴史に刻まれるかもしれないけれど、歴史はただの記録でしかない。記憶と記録の間には越えがたい隔たりがある。

自殺少女について考えた。自分が彼女について知っていることは何一つない。だけど、自分はいま彼女の死の痕跡に触れている。歴史博物館という表現もあながち間違ってはいないのかも、と思う。あたしたちは彼女を歴史人物に見立て、過去を掘り下げようとして

いる。清美や幸司くんはどうか分からないが、少なくとも自分は、彼女のことをもっと知りたいと思っている。
少女はどういう顔をしていたのか。どんな性格をしていたのか。どうして死んでしまったのか。彼女は、この赤い模様にどんな意味を見出したのか。
何にしても、ここに堀ちゃんがいないのは非常に勿体なかった。
「さっきぃ先輩、帰らないんですか？」
後ろから清美の声がかかる。自分は迷うことなくうなずいた。
「おい、マジでお化け出るぞ」
幸司くんは清美と二人きりになるのが恥ずかしいのだろう。何度もあたしを引っ張っていこうとしたが、自分は頑なに拒否を決め込み、円の中に居座り続けた。

気付けば夕方、太陽が住宅の屋根の間に落ちていた。地上から天へと、赤、澄、紺のグラデーションを生みだす。
自分は円の中から一歩も動かず、体育座りでそこにいた。ひとりぼっちだった。相変わらず生の円にいて、死の円を目下にしている。いまだに自殺少女と同じ場所に立てた気がしない。透明な膜を一枚張っているようだった。
このままじゃつまらないから、様々な想いを巡らせてみる。
一度だけ、飛び降り死体を見たことがある。友達の家に遊びに行った帰り道で、例によって隣には堀ちゃんがいた。堀ちゃんとパピコを半分こして家路についていたら、マンションの上空から小さな男の子が落ちてきた。
本当に小さな男の子で、ほとんど幼児と言ってもいいくらいだった。自殺する意志すら持てないだろうから、親の不手際か、ともすれば虐待か。飛び降り死体というより落下死体と呼んだ方がいい。堀ちゃんと自分は電波でも受け取ったかのように、落ちてくる男の子を斜め上に認める。

彼は有無を言わさず自分たちのわずか五メートル前方に落下し、脳漿をあたりにぶちまけた。あれは酷いものだった。右の上腕が肘のあたりまで裂け、両足は擦り傷程度であるものの複雑骨折のために人とは思えない形状をしていた。あとから、めくれ上がったお腹から中身があふれ出た。無事なのは背中の一部だけ。

マンション階上から幾多の悲鳴が聞こえたが、自分たちはパピコをくわえながらじっとそれを見下ろした。とても人の死体とは思えなかったから、自分はそれなりに平気だった。

「あたしもさっきぃも、もし飛び降り自殺したら、こんな風になるんだよ」

堀ちゃんは噛みしめるように言って、男の子を避けて歩いた。なんであのとき、堀ちゃんがそんなことを大事そうに言い聞かせたのか、自分にはよく分からない。だけど、もし飛び降りるにしてもこんな風に脳みそがはみ出ちゃうのは、ちょっと格好悪いな、と自分は思ったのだった。

自殺少女はどうだろう。このビルはあのマンションほどの高さはないから、まだ人としての原型を留めていただろう。彼女は、ドラマみたいにきれいに死ねただろうか。ただの願望だけど、自殺少女はきっと可愛い顔していたと思う。せめてもの救いに、顔以外の部分を損傷して死んでいく姿をあたしは想像してあげた。

ひとしきりの妄想を膨らませたところで自分は立ち上がる。夏にしては肌寒い風が通り抜け、思わず両腕を抱いた。ふとした無意識の中、足もとの円とラインを見下ろすと、身体がふわりと浮き上がる感じがした。

とおく後方で気配を感じ取り、振り返る。塔屋の真っ暗な階段踊り場で、なにか影のような物がうごめいた。そんな気がした。気のせいかもしれない。

「だれ？」

反射的に呼びかけてしまったのは、やはり幽霊恐怖症のせいか。

応えが返ってくるのを期待したが、どれだけ待っても屋上は静寂に包まれていた。

三話・少女レゾンデートル

夏休みが明けると、堀ちゃんにお化けビルのことを話した。
公園のトイレに隠れて、堀ちゃんはバージニア・エスを吸いながら黙って聞いた。
幸司くんの言うように、お化けビルは吉門町の六丁目にあったこと。場所は川沿いを外れた山間の廃セメント工場。ビルの中は巨大竜の化石みたいで、壁にはぼろぼろのビートルズのポスターが貼ってあって、薄赤の円や線もちゃんと見つかった。そのとき自分が感じたこと、更地やビル屋上の匂い、清美や幸司くんの反応など、その詳細を一から十まで分かりやすく説明してあげようとしたのだが、およそ四割方話したところで堀ちゃんが「もういいよ」と疲れた顔で制した。
「さっきぃの話って、ほんと要領を得ないよね。あんたって作文苦手なタイプでしょう？　間違っても作家になんかならないでよね。これじゃ自分で見に行った方がましってもんだわ」
その放課後、堀ちゃんは部活をさぼり、一人でお化けビルに向かった。

あるｗｅｂ漫画に出会ったのは、その翌日。
登校前にコンビニに寄ってチュッパチャプスを購入し、表で舐めながら英文法を復習していたら、ちょうどそこで清美がやってきた。清美はあたしを見つけると小走りでやってきて、挨拶もなしにスマートフォンの画面を見せつけてきた。
「自殺少女の新情報ですよ、さっきぃ先輩」
疑惑半分に、自分はスマフォの画面を覗き込む。
画面に表示されていたのは漫画の表紙らしき画像。メルヘンチックな女の子が描かれている。黒いコートにロシアン帽、インナーに

膝丈のワンピースを着ている。そのうえ金髪で色素の薄い肌をしているから、北欧産の絵本かなにかに出てくる女の子みたいだった。背景にはモノクロ調のビル群が並び、それらの表面を突き破るようにしてチューリップや雪割草が咲きほこっている。

タイトルは『少女レゾンデートル』。

「自殺少女が描いた漫画？」と自分は訊く。

「先輩、勘がいい」清美はスマートフォンを制服のポケットにしまった。「さっきぃ先輩も、帰ったら読んでみてくださいね」

自分はチュッパチャプスを舐めながら清美と並んで歩いた。早く教室に行って試験勉強をしたかったから、少し歩調を早める。

「どうやって見つけたの？」

「この前の廃墟の写真をブログに載せたら、友達からメッセージが来たんです。この廃墟ビルをモデルにしたらしい漫画を見たことあるぞって、教えてくれました。もしかしたら、もしかするかもって」

「友達って、一年生？　何組の子？」

自分は漫画と同時に、その子にも少しだけ興味を持った。

「何年何組ってわけじゃないです。相手、社会人だから。会ったことないから本当かどうか分からないけど」

「それ、友達なの？」

「ネットの友達です」

それは友達と呼んでいいものだろうか。もし呼んでいいのなら、自分もｍｉｘｉやＧＲＥＥを含めれば百人は超える。ずいぶんキッチュな友人関係だ。

試験が終わり、その日は午前で放課となった。堀ちゃんは柔道部の顧問から呼び出しを食らったので、自分は一人で帰った。

自室のノートパソコンを起動して、アドレスバーに清美が教えてくれたＵＲＬを打ち込む。自殺少女が描いたという、『少女レゾンデートル』のページを開いた。

漫画は、表紙の女の子が信号機を見つめている図から始まる。次のコマには、白黒反転の独白。

――手足をもがれたような気分でした。舌根が乾き、常に全身を渇望が覆っているようです。ソフィアの心はいつも、きつく緊縛されていました。

ソフィアとは、主人公の女の子のことだろう。ソフィアは赤信号にも関わらず、横断歩道の真ん中で立ち止まっていた。すぐさま大きなトラックが突っ込んできて、ソフィアは紙屑みたいに吹き飛ばされた。

――ソフィアはよく、白昼夢を見ます。

血だらけで車道に横たわるソフィアを、もう一人のソフィアが遠くから眺めていた。倒れたソフィアは、両目から真っ黒な涙を流していた。横たわるソフィアから顔をそむけ、もう一人のソフィアは歩きだす。彼女の隣を、薄暗い人影がついて回る。

『君の中には絶えず熱い血が流れつづけている。あんな風に外へ出たいと、外へ出たいと呻いているんだ。君はね、体内にたぎる熱い血液を、薄っぺらい肌に閉じ込めているだけなんだよ』

薄暗い人影は言った。

『君は、嘘つきだ』

唐突にシーンが変わる。

洋風のリビング。ソフィアの母親らしき女性がキッチンに立ち、アイスピックで氷を砕いている。ソフィアはその背中へと徐々に近づきながら、テーブルの上の鋏を手に取った。音もなく近づき、そのまま鋏を母親の首筋に突き立てようとする。開いた鋏の刃先が、彼女のうなじギリギリのところで止まる。肌の上に、鋭い凶刃の影が映っていた。

次のコマで、首から血を噴射する母親が描かれた。そういう白昼夢だった。

それっきり、ソフィアは満足したように鋏を背中に引っ込めた。母親が笑顔で振り返り、氷入りのオレンジジュースをテーブルに運

んだ。
「どっちが本当のお母さんなんだか、わからないわ」
人影はこう返す。
『いま、二つの世界が生まれた。同様に二人のお母さんが存在する。それを創造したのが君だ。とても残酷なことだよ。だって、もう片方のお母さんはこれから、脊椎を損傷した痛みに生涯くるしむことになるんだから』
「聞きたくないわ」
またシーンが変わる。ソフィアはロシアン帽を被っていない。たった一人で、ぽつりぽつりと夜道を歩いていた。街灯によって金色の長い髪がきれいに輝く。道の先から、背広姿の男がやってくる。背広の男は伐採用の電動のこぎりを担いでいた。ソフィアは足を止める。人影が暗闇から姿を現す。
『あの男は帽子を被った女がきらいだ。むかし、街角で出会った女の美人局に合い、金をだまし取られた。また別の女からは、事務所の金を盗んだとして、いわれのない罪を着せられた。つい先日も、電車の乗り降りで彼はある女とぶつかった。彼は即座に謝ったが、女は痴漢と勘違いし駅員を呼んで男を拘束させた。彼を貶める女は、いずれも帽子を被っていたそうだよ』
背広男は電動のこぎりを稼働させ、ソフィアのあごをつかんだ。点検するように彼女を観察する。ソフィアは、自分が帽子を被っていなかったことを幸いに思った。
舌打ちを一つして、男はソフィアをどけて歩きだした。
そして、翌朝と思われる絵に変わる。ソフィアは部屋でニュース番組を見ていた。アナウンサーが、血痕の広がる街道で何事かをカメラに向けて喋っている。
次に被害者らしき少女の写真が画面いっぱいに映った。黒いロシアン帽を被ったソフィアだった。
「こういうこともあるのね」
『こういうこともあるのさ』

また場面が変わる。
小学校の教室。給食の時間らしく、児童が四人一組で机をくっつけていた。そんな中に、ソフィアは黒いコートとロシアン帽という奇妙な出で立ちで児童に混ざっていた。そこで独白。
――ソフィアは給食に出てくるグレープゼリーが好きでしたが、給食は大の苦手でした。いつ自分が他人のグレープゼリーを奪ってしまうか、それを考えると、自分の中に住む悪魔に身がすくんでしまうのです。
ソフィアはグレープゼリーを食べ終わると、隣の席の子のグレープゼリーを盗み見た。その席の男の子は、男の子と呼ぶには疑問を抱くほど強靱な肉体を持っていた。座っているだけでソフィアの頭二つぶんは上にいる。
ソフィアは男の子からゼリーをかすめ取る。次には、男の子の手にしたフォークによって、彼女の手のひらは深々と貫かれていた。
「ありえないことだわ」
小学校をあとにするソフィアの後ろを、影は地面を這いながらついてくる。校門前には、フォークでめった刺しにされたソフィアが倒れていた。ソフィアは、倒れるソフィアに目もくれず、校門を通り過ぎていく。
『いいや。実現は難しいが、ありえないことじゃない』
人影は難しい声で言った。ソフィアは突然地面を蹴り、ふわりと空中に浮いた。
「ありえないことじゃない。それなら、こうも言えるわよね」
薄暗い人影もソフィアを追い、宙へと飛んだ。ソフィアたちはぐんぐんと上空に舞い、雲を突き抜ける。激しく照射する太陽のもと、ソフィアは飛行を止めた。
「私には、存在価値がない」
少女と人影はくるりと反転し、重力に従って落下を始めた。ごうっと言う音が二人を取り巻き、一気に雲を突き抜け、地上へと墜落していく。

ここで、独白とともに回想が挿入される。ソフィアのお父さんとお母さんらしき人たちの回想だった。
――ソフィアの両親ははじめ、パン屋の店員と客という関係でした。お父さんはパン屋のしがない販売マネージャー。お母さんはどこにでもいる普通の大学生。
――ソフィアのお母さんは、その日大学の友達と遊びに出かけることになりました。友達から、美味しいパン屋さんを紹介してあげると誘われたのです。もしお母さんが友達の誘いを断っていれば、お母さんはお父さんと出会うこともなかったのです。
――それはひとつの運命でした。お母さんはその日風邪を引いていたので、誘いを断るかどうか迷っていたのです。
ソフィアは落下しながら、若き頃の母の後ろ姿を瞼の裏に映していた。
「私が生まれたのは、ほんの偶然なのよ」
人影は言う。
『でも君はいま、両親から必要とされている。両親は君を宝娘だと評価する。君は生まれるべくして生まれ、この世になくてはならない存在だったのだと彼らは言う』
「嘘っぱちね」
『そう、嘘っぱち。すべての生物には、存在価値というものが欠落している。生まれるべくして生まれる生物はいない。したがって、この世になくてはならない存在などあるはずがない』
少女は完全に浮遊力をなくしている。まっさかさまに落下し、やがて顔から地面に激突する。顔のつぶれた様子は描写されず、顔面はただ黒く塗りつぶされていた。ソフィアは、その黒い顔を人影に向ける。
「私のいる世界と、いない世界があるのね」
『そう。顔のある君と顔のない君が共存するように』
「あなたはどっち？」
『顔のある君』

顔のあるソフィアと顔のないソフィアが対峙した。
舞台が入れ替わる。二人のソフィアは廃墟の中にいた。見覚えがある。お化けビルにそっくりな場所で、どうやら一階ロビーのようだ。竜の化石みたいな壁面がバックに見えた。
「私のコートには手斧が隠されている。隠されていることにする。本当はないけれど」
顔のないソフィアは黒いコートの裏側に架空の手斧を忍ばせた。
「これを使うか使わないか、私の存在はそれだけで左右される」
顔のないソフィアはコートから手斧を抜き、顔のあるソフィアに振り降ろす。顔のあるソフィアは薄暗い煙と化し、空気に溶けて消えた。
さらに舞台は飛び、あの屋上へと移り変わる。荒廃とした広い屋上の床。今にも倒壊しそうな塔屋。風によって砂塵が巻き上がり、曇り空が濃くなっている。屋上の様子を数コマにわたって描写しており――それだけだった。そこで漫画は終わっている。
自分は首を傾げ、マウスを操作する。いくら探しても、次のページは見あたらなかった。

四話

ノートパソコンにかじりついて一時間。胸いっぱいに喪失感が押し寄せてきて、それが嫌になった自分はごろりとベッドに横になった。漫画は本当にここで終わりなのだろうか。

テーブルから飴の缶を取って、中から塩キャンディを選んだ。素朴な味が今の気分には合う気がした。

眠くもないのに目を閉じて、シーツの上で天井をあおぐ。舌でうす塩味を転がし、ソフィアのことを考えようとするが、所感も上手くまとまらない。

枕元で携帯電話がふるえた。ゆっくりと間を置いて通話ボタンを押す。受話口から、清美の声が「見ました？」と言う。

「なにを？」

「自殺少女の漫画です。少女レゾンデートル」

「見たよ」

「そうですか」

それから清美は、なにかを期待するように沈黙した。その意図が読めず、自分も黙り込む。開けはなったカーテンが揺れ、羽虫が一匹部屋に入りこんだ。いけないと思い、さっと起きあがって窓を閉めた。沈黙は続く。

やがて聞こえてきたのは彼女のため息だった。

「もう。なにか感想とかないんですか」

そうくるだろうな、と自分は窓越しの外の風景を見つめて考えた。街灯に照らされた寂しい住宅街道しか見えない。会社帰りらしいおじさんがだるそうな足取りで横切っていく。

塩キャンディが小さくなってきたので、かみ砕いて喉に流す。そこでやっと自分は口を開いた。

「まあ、良くも悪くも不条理漫画だね」

「良くも悪くも不条理漫画」

清美は無機質にあたしの口調を真似した。彼女の呆れ顔が目に浮かぶようだった。申し訳ないと素直に思う。

「私、だんだん心配になってきます。だってさっきぃ先輩、感情死んでるみたいだもん。こういうオカルト事に興味ありそうだったから私、期待していたんですよ。ねえ先輩、この話題冷めちゃってますよね。幸司先輩も堀先輩もエースだからあんまり邪魔できないし、孤独ですよ私」

「いや自分、そんなことは……」

「いいですよ無理しなくて。私、さっきぃ先輩のそういうところ、嫌いじゃないですから」

今度私の家に遊びに来てください、もっと面白い物見せてあげます、そういう意味の話をして、清美は電話を切った。彼女の口振りからは、自殺少女の件はｗｅｂ漫画を見つけた時点で完結していそうだった。

会話というものは難しい。嘆息し、携帯を枕にほうり投げる。

もう一度パソコンに向かい『少女レゾンデートル』を開く。掲載されたページの全てをプリントアウトし、ファイルに挟んでその日は寝ることにした。

翌々日の日曜日。堀ちゃんや清美からの遊びの誘いは断った。クローゼットで埃を被っていたエコバックに、例の漫画を挟んだファイルを入れて持ち出す。真白ヶ丘市のポケットマップも用意した。履きなれたヴァンスのスニーカーで、朝十時に外出する。

真白ヶ丘森林公園は、吉門町と清水町の間に割り込むように位置している。東日本有数の敷地を誇る自然公園だ。こういった休日にはランニングウェアを着た老人サークルの集団や、首から一眼レフを提げた野鳥趣味の人々が多く見られる。

森林公園を横切ると、すぐに商店街や神社が見えてくる。この前の夏休みでは、あの一帯で縁日が開かれていた。それだけでなく、

この周辺は年中賑やかだ。
『お化けビルをモデルにしたらしい漫画』とは、『少女レゾンデートル』のことだ。仮に自殺少女がこの漫画の作者だとして、果たして、本当にモデルはお化けビルだけだろうか。たとえば、真白ヶ丘市全体が漫画の背景となった可能性も捨てきれない。
商店街入り口には大規模な交差点があった。エコバックからファイルを出し、漫画の冒頭部を見返す。
激しい車の往来の中、少女ソフィアは交差点の真ん中で立ちすくむ。交差点の奥には、この商店街入り口とよく似た商店街アーチが描かれていた。間違いない、と自分は確信する。
漫画から顔をあげ、青信号の交差点を渡る。
漫画に描かれた風景と同じ視界が、あたしの眼前に広がった。歩道の先で赤信号が表示されると、殺人的な車の波が絶えず左右からやってくる。ソフィアが大型トラックに轢かれたあたりを、自分は注視した。
この場所だ。ソフィアは白昼夢の中、たしかにここで死んだ。人の命の軽さを具現するように、彼女は空き缶みたいに吹き飛ばされ、宙を舞い、地面に倒れ伏した。両目から真っ黒な血の涙を流して。
漫画で、彼女につきまとう薄暗い人影が言った。
『君の中には絶えず熱い血が流れつづけている。あんな風に外へ出たいと、外へ出たいと呻いているんだ。君はね、体内にたぎる熱い血液を、薄っぺらい肌に閉じこめているだけなんだよ』
ソフィアと薄暗い人影を幻視した自分は、淡い充足感とともに次の場所を目指した。

次はソフィアがお母さんに向けて鋏を振りかざすシーンだが、これはどう見ても一般家屋内の場面だ。それらしい家を見つけたからといって、軽々しく「入れてください」と言えるほどの図々しさを自分は持ち合わせていない。
次の舞台も難しい。電動のこぎりを抱えた通り魔男のシーンだ。

作中でも、あたりは真っ暗に描写されているため、舞台モデルを探し出すのは不可能だろう。
そして小学校のシーン。こちらはすでにリサーチ済みである。ネットで真白ヶ丘市に点在する小学校のＨＰを回ったところ、漫画に登場したのとそっくりな学校を発見していた。
小学校の門は鉄柵で閉じられていた。日曜日だから当然だ。漫画と比べると、相違点を見つけだすのが困難なほど外観が似通っていた。
校門の前で腰をおろす。『少女レゾンデートル』によると、フォークでめった刺しにされたソフィアはこのあたりで倒れていた。現場のおおよそな検討をつけた自分は、チュッパチャプスをくわえながら、ひそかに口元に笑みをたたえる。自分の目には、彼女が二つの世界を隔てた向こう側で、実際に血まみれで倒れているように見えた。
『君はね、体内にたぎる熱い血液を、薄っぺらい肌に閉じ込めているだけなんだよ』
白昼夢のソフィアは血液の象徴なのだ、と自分は思う。絶えず高速度で体内を循環していく血液。血はいつでもたぎっていて、肌という薄い壁から飛び出すその日を夢見て、抑えきれない衝動を躍動という形に留めている。ソフィアはきっと、目の前にナイフが置かれたら煩悶してしまう、そんな女の子だ。
同時に、彼女はもっと多くのメタフォリカルを表象しているだろう。彼女は人の存在理由そのものであり、仮世界への夢想であり、単純な暴力であり、作者自身が抱える暗い感情なのだ。
自殺少女はなにを思って死んだのか。自分はずっとそのことについて考えてきたが、実は大した理由などないんじゃないか。感情に突き動かされた単なる脅迫観念でしかなかったとしたら。もしそうであれば、自分がこれから探すのは、その自殺少女を殺すに至ったなんらかの誘因だろう。
道行く人から不審に思われないうちに立ち上がり、その場をあと

にする。
やはり最後に向かう場所は、吉門町の六丁目、廃墟のお化けビルだった。

廃セメント工場の広大な更地に立ち、リングを見下ろす。今日もリングは、雨風に晒されることを知らないようにくっきりとアスファルト上で朱色に映えている。スニーカーの底で、表面にたまった砂を払う。そして廃ビルへと足を踏み入れた。
これまでのように、漫画と実際の背景を見比べて、満足感に浸りながら徐々に上の階を目指していく。
屋上の扉を開けると、落ちかけた西日のまばゆい光に目を細めた。屋上の一部に、西日を遮る人型のシルエットがあることを、自分はいち早く察知していた。光に目が慣れてくると、自分は少しずつ、その人物を視認した。
中学生くらいの男の子だった。同い年かもしれない。七分袖のシャツにスウェットパンツ、使い込んだようなスニーカーを履いている。たぶんコンバース。自分が言うのもなんだけど、ちょっとそこまで散歩しにきました、みたいないい加減な格好をしている。それでも野暮ったさを感じさせず、むしろ爽やかな印象を与えるのは一種の才覚だった。
彼はこちらに背中を見せ、片手を腰に当てて斜め下を見下ろしていた。その視線の先は、おそらくあの朱色のリングとラインだった。彫像のように、ぴたりとも動かずそれらを見つめている。
最後のチュッパチャプスを口に入れて、そっと、男の子の背中に近づいていく。やがて彼は、ゆるやかな動作で振り返った。細く形作られた目が見開かれ、軽い驚きを表現する。どうも悪い人には見えない。あいさつでもしてみるか、と思い立ったところ、彼の方が先に口を開いた。
「もしかして、君が日野咲子さん？」

今度はこちらが驚く番だった。飴の棒をつまんで口から出し、指で持てあましながら口をつぐむ。いくら記憶を掘り返しても彼に見覚えがない。どう答えるべきかひどく迷ったのだが、ともかくあたしは、「そうだけど、あんただれ？」と返してみた。

断章

夜は深けり、鈴虫が鳴き始める。吉村は真白ヶ丘森林公園の奥へと歩を進めた。

アスレチック広場と呼ばれる、その名の通り様々なアスレチック遊具が軒を連ねる広場に入る。日中の景観が嘘のように広場は灰色に染まっている。人の気配というものが死んでいた。

スウェットのポケットから携帯電話を取り出し、『堀中佳代』の名で登録された番号を呼び出す。

吉村は夕方のことを思い返す。廃墟ビルを訪れた彼女は、堀中佳代を『堀ちゃん』と呼んでいた。彼女にとっての『堀ちゃん』は友達以上の存在だった。『堀ちゃん』を語る彼女の目には憧憬が表れていた。親友というよりは、家族に向けるような手放しの連帯意識。それだけに干渉性が欠如していたように思える。

吉村は息を吐いて携帯を操作し、堀中佳代の番号に発信する。堀中佳代はすぐに電話に出た。

「なんか用？」

投げやりな第一声だった。この場所で落ち合うよう仕向けたのは君だろう、と言いたくなる。彼女の言う通り、堀中佳代は自由な女の子らしい。

「なんか用じゃないよ堀中さん。僕、もうアスレチック広場に来てるんだけど」

「あー、早いね」

そこでいきなり電話が切られる。呆れながらも辺りを見回すと、こちらに向けて手を振る者があった。堀中佳代だ。彼女はケヤキ造りのお城からひょこりと頭を出し、怠そうに右手をひらひらさせる。

近づいてみて分かる。堀中佳代は細い煙草をくわえていた。先端から立ち上る白煙が夜風に揺れ、闇に溶けていく。

吉村はケヤキ城を上る。

城の最上階、といっても所詮はアスレチックだが、そこは三方を木製の壁に取り囲まれたほどよい隠れ家となっていた。堀中佳代は隅っこを陣取り、体育座りで煙草をふかしている。学校指定らしきジャージを着崩した風貌は非行少女そのものという感じだった。吉村は彼女の隣に背中をあずける。

「煙草吸うんだね、堀中さんって。僕と同い年じゃなかったっけ？」

「いいじゃん別に。人生は紆余曲折なのよ」

これが中学二年生の台詞なのか。年寄りじみていて滑稽だった。吉村は横目に煙草の細長い巻紙を観察する。

「ヴァージニアスリム？」

堀中佳代は煙草を手に持ち直して、煙とともに小さく吹き出した。

「よくそんな旧名知ってたね。君っていつの時代の人間？」

そして彼女はポケットから煙草の箱を取り出して吉村の膝に放った。『ヴァージニアエス』と英字で表記されている。どうでもいいな、と吉村は思った。

「なに、そのどうでもよさそうな顔」

「実際どうでもいいから」

煙草の箱を返した。受け取りながら、彼女は「君も吸ってみる？」と尋ねる。吉村は首を横に振った。

堀中は丸太の床に煙草を押しつける。床は黒ずみながら火種を消化する。火事にならないかと心配してしまう。

「さっきぃには会えた？」

彼女は吸い殻を丸太の間に押し込みながら言った。甘い証拠隠滅だな、と思いながら吉村は答える。

「会えたよ。堀中さんの予想通り、お化けビルの屋上で待っていたらね」

「嫌な予想が的中しちゃったね」

堀中佳代は乾いた笑い声を立てる。口もとだけを軽くゆるめたアーケイックな表情。反して吉村の浮かべる笑顔はさっぱりしている。

「咲子さん、最初は警戒しまくってたんだけどね。でも徐々に落ち

着いていって、いや、冷めていったという感じかな。彼女、基本的に他人に無関心みたいだね」
「吉村くんに魅力がないだけじゃない？」
思わぬ返しにやられ、吉村は苦笑いで頬を掻く。
「そうかもしれないね」
「そうよ。面白くもないのに笑うやつって信用ならないね。僕実は腹黒いんですよって言ってるようなものじゃない。絶対性格悪いでしょ、吉村くんって」
「堀中さんほどじゃないけどね」
彼女はむっとして、肘で吉村の腹を小突いた。突かれた箇所をさすりながら、吉村は努めて穏やかな笑みを保つ。彼女の言うように、胸のうちから黒いものが溢れ出てしまいそうだった。
堀中佳代は二本目の煙草を口にした。火を点け終わるのを待って、声をかける。
「僕の勘、当たりそうかな」
彼女はすうっと煙を吸い込み、吐いた。
「君の勘じゃなくて、あたしの勘じゃないかな」
「どっちでもいいよ」
彼女の瞼は閉じられている。周囲の木々がざわめき、ケヤキの城にも風が入り込んでくる。煙と一緒に、彼女の長いまつげも揺れた。
「なるようになるんじゃないの。そのうち」
「根拠は？」
堀中佳代は顔をしかめる。
「根拠なんてあってたまるか。ただなんとなくよ」
一度言葉を切り、彼女は両足を抱いた。膝の上にあごを置き、また煙を吐く。
「なんとなくなんだけど、あたしの勘って結構当たっちゃうんだよね。こういうことばっかり」
ぷっ、という音を立て、煙草を前方に吹いて飛ばす。煙草はちょうど丸太の間に挟まり、白いもやを上へと真っ直ぐに伸ばした。吉

村は黙ってそれを見つめた。もし丸太に火が移るようなら消してやるところだったが、やがて、酸素欠乏を起こした煙草の先端は音もなく鎮火した。
「言わせてもらうけど、勘や予兆で終わらせるほど僕は消極的じゃないからね」
彼女はもともと鋭い目つきをさらに尖らせ、吉村を睨め付けた。
「君って、マジで性格悪いんだね」
吉村は肩をすくめる。
「そんな風に思うくらいなら、堀中さんが止めてみたらいいじゃないか」
「出来ることならとっくにやってるよ。あの子って病気なの。不治の病。それでも、さっきぃだってよちよち歩きの三歳児じゃあるまいし、もう子供じゃないんだ。もう十四歳。うちらが何やったって最終的な意志決定くらい自分でするのよ」
「僕に言わせれば、堀中さんも出来た人間だとは到底思えないね」
ゆっくりと吐き捨て、吉村は立ち上がる。終始表情を崩さず、ヒノキ城を降りていく。彼女はそっぽを向く。膝立ちになって木の塀に両肘をかけた。
吉村はケヤキ城から離れていく。ふいに足を止め、堀中佳代を振り返った。
「堀中さん」
彼女は答えず、むすっとした目で彼を見下ろしていた。
「煙草、止めた方がいいよ。その口の悪さもね。せっかく可愛い顔してるんだから」
堀中佳代は、今日一番の嫌悪感を浮かべる。無言で中指を立て、城の中へと引っ込んだ。
そこでようやく、吉村は笑みを解く。おそろしく無感情な瞳を前方に向け、足早にアスレチック広場を後にした。

五話

武道場の畳で受け身の練習をしながら、ふいに、これはなんて意味のない行為なのだろうと思った。

柔らかい伊草を打った手のひらが緩衝材の役割を果たし、衝撃を和らげてくれる。中学生一人分の負荷を逃がすくらいで、大仰なことだ。これに更なる高低差が加わったらどうなるだろう。そんな風に思いながら天井の照明を見上げる。

場内にこだます掛け声に寒気を覚える。自分一人が寝ころんだままなのは非常に目立つらしく、顧問の古木先生があたしの傍にやってきて何やら言葉をかけてきた。

鼓膜に穴があいたみたいに聴覚が虚ろだった。半身程度に身体を起こし、ぼんやりと古木先生を見あげる。彼はあたしの目線に腰を屈めて心配そうに顔をのぞき込んでくる。

縦移動打ち込みの稽古をしていた堀ちゃんと清美も、動きを止めてこちらに視線を送った。

古木先生の二の腕は大樹のように太く、血管が浮き出ている。彼は元国体選手だ。柔よく剛を制す柔道に現実をたたきつけるのは、奇しくも彼らのような上位選手だった。自分がいくら鍛えたって、所詮は女子中学生の域を出ない。もし彼らに武道の心得がなかったとしても、このような体格差を前に一体なにが覆るというのか。

三日前に出会った吉村くんの顔と、屋上のラインを脳裏に映し出し、幾多もの死体を回顧する。予想外のリアリティに思わず目頭を押さえる。息をのみ、自分は口を開いた。

「部活、辞めます……」

古木先生は言葉を失う。だが、すぐに穏やかな笑みを浮かべ、あたしの肩を軽く叩いた。

「どうした。気分でも悪いのか？」

一応自分は、堀ちゃんに次ぎ、試合で堅実に実績を重ねていく選

手だった。嫌でも期待されているのが伝わってくる。こういう反応をされるのも分からないではない。
それでも自分は首を振る。「辞めます」。ふらりと立ち上がり、髪の結びをほどきながら武道場から出ていく。その際、後ろから先生の声が掛かったが、聞こえないことにした。

自宅でシャワーを浴び、台所から一本の果物ナイフを見つけ出した。刃渡り十センチほどの小さなナイフ。刃を新聞紙に包んで上着のポケットに入れる。おもちゃ同然の重みでも、布越しにちゃんと届く。柔道や合気道なんかよりずっと、護身という感じがした。
家族が帰ってくる前に家を出ると、廃墟ビルへ自転車を走らせた。発電式のライトの音がうるさかったので、スイッチを切った。川沿いの歩道が夜の海のように不鮮明になる。ペダルを漕ぐ速度は落とさなかった。
廃墟ビル屋上には吉村くんが居た。ライン縁から足を投げ出し、空中でぶらぶらさせている。少し肌寒い夜だったが、彼は半袖のポロシャツ一枚だ。傍らにブルーの寝袋が転がっている。あたしの来訪を、彼は笑顔で迎えた。
「吉村くんって、ここで寝泊まりしているの？」あり得ないことを言ってみる。
「いや、もしかしたら咲子さんが使うかもって」
どういう思考回路をしているのか頭皮の内側を覗いてみたい。自分は、ホームレスに憧れているなどと言った覚えはない。
だが反論するのは面倒なので、寝袋のチャックを開き、スニーカーを脱いで中に収まってみた。黙々とチャックを首もとまで上げる。みの虫状態の直立不動で、吉村くんを睥睨する。笑われた。
「無表情で冗談に乗っかってくるの、やめてくれない？」
「あんたが用意したくせに」
寝袋のおぼつかない足を交互に動かし、高さ十五センチほどの段

差を上る。なかなかの重労働だった。赤い境界線に腰掛け、吉村くんと同じように足をぶらりと提げた。
「それ、滑って落ちるかもしれないよ」
言うだけ言ってみたという口調で指摘される。
「もし落っこちたら、そのときはそのとき」
一度チャックを開き、団扇みたいな形の飴を出す。ペコちゃんキャンディだ。包装ビニールを取って屋上の外へと投げ落とした。キャンディを口に入れて、またチャックを首もとまで上げる。
口から生えた棒を上下へと揺らし、顔の筋肉だけで飴の位置を調整する。そんな自分の面白い顔を、吉村くんはちらりと流し見た。
「手伝おうか」
自分はうなずく。彼は人差し指と親指で、棒をつまむ。キャンディをあたしの舌と平行にして、左右に滑らせる。くすぐったい。
「右と左、どっちがいい？」
返答するべく唇を開く。棒を持ってもらっているので安心だった。
「左」
再び閉じる。要望通り飴が左に固定されて手が離れる。左側に飽きると、吉村くんに目で合図して、今度は右側に寄せてもらう。そんな風にして最後まで飴を舐め切った。
棒だけになっても上下に揺らし続けていた。やがて吉村くんが微笑を浮かべて、「行儀悪いよ」と、あたしの口から棒を抜き取った。あたしが包装ビニールを投げ捨てたように、吉村くんも棒を屋上の下へ放った。白く細長いそれは暗闇に溶けながら落ちていく。
自分は目を凝らした。月光にうっすらと、地面に横たわるそれが確認できた。
「なんか、すごくいけないことしてる気分」
見下ろしながら、自分はぽつりと言う。吉村くんは小さく笑みをこぼすだけだった。

いつの間にか、自分は縁の上で横になっていた。頭がちょうど赤い円の中に収まっている。膝が九十度の角度で空中にぶら下がる。自分は寝袋のまま、仰向けで寝ていたようだった。頭上高くに半月が見える。

吉村くんはもう居ない。さきほどまでそこに居たという、うっすらとした気配が残っていた。

居眠り以前との変化といえば、吉村くんの不在、そして月の在処くらいのものだ。

寝袋の中、上着のポケットから果物ナイフを抜き取る。窮屈に手を動かす。新聞紙を丁寧に取り払い、刃を露出させる。左の手首に刃先を当て、ゆっくりと瞼を下ろす。

『君の中には絶えず熱い血が流れ続けている』

刃の先端が食い込み、手首の皮膚が丸くへこむ。見なくても、感触として分かった。あとどれくらい力を入れれば、この薄い皮は突き破られるのだろうか。徐々に、柄を握る手に力を込めていく。針金の先が触れる程度の痛みが、しだいに変色していく。

もう破れたかな。

いや、たぶんもう少し。

ここだ。

ここで止める。

皮膚が皮膚としての役目を担うボーダーライン。刃先は、そんなぎりぎりの境界に存在している。心臓の鼓動が全身を打つ。どくどくと、血流音が耳の奥に聞こえた。反対に頭の方はとろけそうなほどに朧気。初めて朱色のラインと円を見た瞬間と、よく似ていた。

吉村くんの居た場所から、薄暗い人影の声が聞こえる。

『いま、二つの世界が生まれた』

そう、二つの世界が生まれた。手首から血を吹き出す自分と、そうでない正常な自分。痛みに震える自分と、ラインを越せずに落胆する自分。

そんな多重世界を創造したのも自分自身だった。いたずらにボー

ダーラインに立ち、運命を弄ぶ。たしかに、残酷なことだ。
ぷつり、という音をかすかに聞き取る。
あわてて寝袋のチャックを下ろした。左手首を確認すると、赤い血玉がぷっくりと浮かんでいた。血玉はやがて形を崩し、細い線を手首に伸ばしていく。やがて一滴、膝頭にしたたり落ちた。
全身の熱を夜風に冷やしながら、深い嘆息。
こうして、あたしの世界は収束していく。

六話

家に帰ると、救急箱から消毒液と絆創膏を見つけ出した。
結局あれから七回ほどボーダーラインを行き来したので、左の手首には七つの小さな刺し傷が残った。密集したそれらの傷は何かの星座のように見えなくもなかったが、天体の知識が乏しい自分には適切なレトリックを引き出せなかった。
ガーゼに消毒液を垂らして傷全体に伸ばしていく。絆創膏では七つ全ての傷を覆うことは出来なさそうだったので、包帯を二周ほど巻いた。自傷が趣味の痛い子みたいな手首になった。部屋に戻って、半年前に買ったきり使う機会のなかった赤いリストバンドを探り出して、包帯を隠すようにして着けた。
リストバンドの上から表面を撫でつけると、それぞれの傷がちくりと痛んだ。ベッドに腰掛けながら、しばらくその感覚を楽しむ。飴を舐めるのも忘れて、時間が許すかぎり楽しんだ。
翌日の朝にはだいぶ痛みも引いていたのだが、それよりリストバンドを着けたまま登校するのは校則的にどうだろうと今さら悩んだ。
実際、今朝早くに廊下で教頭先生と出くわし、リストバンドについて注意されてしまった。
「ファッションは個々の自由だが、一応ここは学校だからな。先生も一人一人の個性を尊重したい気持ちは大いにあるが、つまり、なんだ」
要領を得ているのか得ていないのかよく分からないお説教をして、少し口ごもる。黙って教頭先生を見上げていると、先生は気まずそうにおほんと咳ばらいをした。
「とりあえず、外したらどうかな」
外しなさいじゃなくて、外したらどうかな。気の弱い教頭だなと思った。でも調子に乗って反抗するのもどうかと考えて、自分は軽くうつむき、恥ずかしそうに両手を前で組んで指をいじった。そう

いう演技をしてみせた。
「昨日料理に挑戦してみたんですけど、失敗したんです。包丁の持ち方が変だったみたいで、落としちゃって、手首を怪我しちゃって……。でも自分、友達にはいつも、あたし料理うまいんだよって自慢してるし……」
教頭先生は目に見えて慌てていた。あたしがそのうち泣き出すとでも思っているらしい。廊下を通り過ぎていく生徒たちの視線も、明らかに自分たちに集まっていた。
「そういうことなら、まぁ情状酌量だな。うん、分かった分かった。教師陣には私から伝えておくから。そのかわり、傷が治ったら必ず外しなさい」
「はい……」自分でもびっくりなくらい、しおらしい声が出た。
教頭先生はしばらくあたしのうつむき顔をのぞき込んでいた。まだなにかあるのだろうか。うんざりしつつも演技を続けた。やがて彼は、心配そうに声をひそめる。
「なにか悩みがあるなら、誰かに相談しなさい。教師じゃなくてもいい。友達や家族でも。本当に信頼できる人なら誰でもいいから」
そしてあたしの肩をぽんと叩き、廊下を去っていった。ため息を吐く。きっと教頭先生は、自分が先日部活をいきなり辞めたことを聞いて、それを引き合いにいらぬ杞憂を起こしているんだろう。本気で可哀想な子認定されそうな気がしてきた。リストバンドを撫でながら自分は教室に入った。
扉を開けた瞬間、教室の喧噪がなだれ込んでくる。「さっきぃおはよう」と、何人かのクラスメイトが声をかけてくる。適当にあいさつを交わしながら早急に自分の席について、手首のことを指摘されないようそれとなく机の下に隠した。
本当に信頼できる人。そんな人、いたっけ。
少なくともこの教室にはいないだろう。現状、自分はこのリストバンドをなるべく目立たないよう努めている。追究されるのは面倒だし、また、知ってほしいとも思わない。

そういう意味では、自分にとって、このクラスには表面的な繋がりしかないらしい。こうした一線を引いていたことに気づけるのは新鮮で、新しい発見でもあった。こんな大事なこと、機会がなければ認知すらできないんだな、と密かにほくそ笑む自分だった。

放課後になって改めて校舎を見上げると、仰々しいまでの垂れ幕が掛かっていた。

『祝　全国中学柔道　個人出場！』

四十キロ級に堀ちゃん、五十五キロ級に幸司くんの名前がある。自分が部活を引退してから数日後に行われた予選を、見事二人のエースは通過したらしいが、あれから堀ちゃんや幸司くんには会っていなかったし、それとなく自分に気を使う知人たちは柔道に関した話題をあげてこなかったので、これは初耳だった。あの二人のことだから意外でもなんでもないけど。

携帯電話を開くとメールが一件届いていた。見覚えのないメールアドレス。件名に『吉村浩介です』と表示されていて、心臓が跳ね上がりそうだった。

どうして、あたしのメールアドレスを知っている？

本文を開くと一行目に『学校は終わりましたか？』とあって、二行目に『迎えに行きます』と書かれていた。かなり一方的だ。しかし、吉村くんはあたしがどこの中学に通っているか知っているのだろうか。憶測だけど、吉村くんは自分と同じ中学生だろう。廃墟の屋上で数回ほど会った程度だが、恐らく彼も近所に住んでいて、たぶん真白ヶ丘市民。

そういえばと思い返すと、吉村くんは初見からあたしを知っていたようだった。あれは間違いなく初対面だったはず。あんな不思議なオーラを持つ人、一度でも会っていれば忘れるわけがない。自分は無意識下、見えない煽動を前にあえて事情を聞かず、涼しい顔で彼に迎合したが、こんなメールまで来ると流石に不信感を拭えない。

自分を知る何者かが陰で吉村くんとつながっている。明白だ。ちょっと気分が悪いけど、それが誰なのかは大体検討がつく。自分はただ、知らん顔でその何者かの帳尻合わせに付き合うだけだった。

となれば、こんなところでぶらぶら歩いている暇はない。自分は急いで校門へ向かった。

途中、校庭の隅には鉄棒があり、数人の女子がたむろして談笑していた。その中に清美がいて、彼女は鉄棒に肩を預けてひまわりのように微笑んで垂れ幕を指さしていた。結構久しぶりで、もっと言えばあたしが部活を辞めた日ぶりだった。清美に気付かれないうちにさっさと学校を出てしまおうと思ったのだが、とても運悪く見つかってしまった。彼女は同窓会で再会した旧友を見るかのような輝かしい瞳をたたえて、あたしに手を振った。友達数人に別れを告げて、早足で自分を追いかけてくる。

「さっきぃ先輩！」

聞こえないふりをして、自分は足を早めた。ほとんど走っているんじゃないかというほどに。そのまま門をくぐる。横をちらりと見ると、校舎にかかっていた幕の横書きバージョンが、フェンスにすらりと伸びていた。恐る恐る前を見ると、見慣れない制服を着た男子が道の先に見えた。距離にしておよそ五十メートル。目を凝らすと、柔和な笑みを張り付けた彼があたしに手を振っていた。自分は、もう走り出していた。

「待ってくださいってばっ」

ここで清美が横に並んだ。さらに焦って、併走してくる清美を横目に確認。彼女は泣きそうな、半分怒ったような顔で「なんで逃げるんですか！」と喚いた。

「なんで部活やめちゃうのか、ちょっとくらい話してくれたっていいじゃないですかっ」

「彼氏！」

気付けば、自分はそんなことを口走っていた。清美は引っぱたかれるようなリアクションをした。だが、思いつきに口にしてしまっ

たとはいえ、これは結構いい自己弁護かもしれないと思った。
門のフェンスを越え、もういいだろうと思い、自分は足を止める。二メートル先で清美もやっと立ち止まる。
「彼氏、できたから。辞めるんだよ、部活」
息が弾んでいた。清美も同じように、肩で息をしながらあたしを見つめ返した。誕生日パーティのドッキリでもやられたら、あるいはこんな顔になるかもしれない。
自分はスカートのポケットから塩キャンディを出して口に入れた。走って汗をかいたから塩分を補給しようと思った、からではない。単に塩キャンディしか今は持っていなかった。とぼとぼと歩き出しながら、駆け足でやってくる吉村くんを出迎える。
清美は唖然と、自分たちを見ていた。
「やぁ咲子さん。うわ、すごい汗」
吉村くんはポケットからぐしゃぐしゃのハンカチを出して、そのくせ英国紳士然とした笑顔と所作でばさっとハンカチを広げ、その広げた状態のままあたしに手渡してきた。
「どうも」
ハンカチで汗を拭いながら振り返る。清美はまだびっくりしたままだった。二、三度、あたしと吉村くんを見直している。吉村くんは清美に微笑みかけて、小さく会釈した。あたしはさらに後方を見据えた。
「こういうことだから」
それだけ言い残し、面倒なので迅速に吉村くんを押して歩く。清美がこの展開をどう思っているのか知らないけど、これ以上この場で話し込めるほどのんびりしていられなかった。
「ちょっと、ねえ咲子さん」背中を押されながら、窮屈そうに吉村くんが言う。「あの子はいいの？　ていうか、なんでそんなに急ぐわけ？」
「あの子は後輩。もう気にしなくていいから」
昨日まで悠長に構えていた自分だったが、思ったよりややこしい

事態になってきたようだ。全部堀ちゃんのせいだ、と心の中で毒づく自分だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6321y/

ボーダーライン

2011年12月17日23時51分発行